

あかしびと 105号（夏季号）2022年7月発行  
日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会  
☎236-0046 横浜市金沢区釜利谷西3-36-20 tel/fax 045-783-5475  
（牧師）森島牧人・森島恵  
（教会）[church.kanazawabunko@gmail.com](mailto:church.kanazawabunko@gmail.com)  
（ホームページ）[kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp](http://kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp)

## 「平和を実現する人々」

牧師 森島牧人

金沢文庫キリスト教会に連なる皆さまへのエールとして、一つの事を語りたと思います。



私は、毎年2月、8月、12月と、タイ北部山岳少数民族（カレン族・アカ族）の村での奉仕教育プログラムに、青年たちと共に参加します。そこには、山肌にへばりつくように点在する、藁と竹でできた粗末な高床式の家々が並んでいます。雨季の時には土砂と共に流されてしまい、大きな被害が出ます。そこで青年たちは平らな土地を切り開き、雨季の時のシェルター兼チャペルを村人と共に建設します。私たちが建設したチャペルは、すでにタイでは13棟あります。

村には、水道もガスもありません。考えられないほど原始的で、不便で、貧しい生活がそこにはあります。しかしそのような状況





にもかかわらず、私たちが村人から感じる想いは、穏やかで心やさしく、一心に神を見つめる姿です。

現在私たちは、便利で物に溢れ返る、一見豊かな生活を送っていますが、決して満たされているわけではありません。“Einsam”という言葉があります。文字通り「孤独」という意味です。しかしドイツ語には、“Zweism”という造語があります。二人でいても寂しい。否、二人でいる時に感じる孤独は一人でいる時に感じる孤独より、寂しく切ないのです。多くのものに囲まれていても満たされず、不安で不幸な状態をも表しています。人はむしろ豊かさの中で悩みが増し、心がすさみ、日々思い浮かべる不安の中に、自らの<不幸>を数えて生きているのではないのでしょうか。

その私たちに比べると、山岳少数民族の村は不便で貧しく何もないけれども、人々は朝が明けると共に賛美の歌声を上げ、そしてまた小さな蠟燭の明かりに顔を寄せ合いながら、夜が更けるまで神を讃えます。私は、その村人の姿の中に、恵みを数えて生きる、神にある<幸い>を見る思いがいたします。



今、私たちの世界は、日々平和を祈り、優しさを求め、そして豊かさを願いつつ生きています。しかし現実には、戦争、テロ、貧困、飢餓、差別、虐待、等々があり、多くの人々は不安を抱えています。一体どこに問題があるのでしょうか。

まずは、「求める方向性」についてです。山の村で気づかされることは、私たちが日頃求めている方向性とは、多くの場合、「あなたは、私にもっと優しくあるべきだ！」と言うものではないのでしょうか。「私が、あなたにもっと優しくあるためには、どうすればいいのだろうか？」という方向性で、私たちは優しさを考えているのでしょうか。

優しさとは、「人」べんに「憂い」と書きます。つまりここで言う「優しい人」とは、おとなしいとか、弱々しい人という意味ではなく、「憂いを持ったことのある人」という意味です。かつて辛い思いをしたことがある。涙を流したことがある。そのような憂いを持ったことの経験が、人を優しくするのです。その涙の思い出が、いま見ている他者の中にもある、悲しみや絶望感と<共鳴>するのです。

故マザー・テレサは、「愛の反対は憎しみではない。<無関心>である！」と言いました。この言葉には真実があります。助けを必要としている人がいるのに、見ていたのに、分かっているのに、敢えて向こう側を避けて通っていった、「積極的無関心」が、いま<神の国>を遠いところに押しやっているのです。

今、皆さんに願うことは、心の内に他者への関心をもって、人生を歩んで頂きたいということです。主イエスは、幸いな人、それは平和をただ考える、また願う、祈る、人ではなく、

「平和をつくりだす、実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5：9)と語ります。

金沢文庫キリスト教会に連なる皆さまが、聖書が伝える神と人にと仕える豊かな心を十分に発揮し、「キリストの香り」を放つ人としてご活躍されることを、切にお祈り致します。



## 目次

「平和を実現する人々」	森島 牧人 (牧師)	p.1
「主イエスに向かって」	羽入田 悦子	p.3
「あかし」	梅谷 興三	p.5
『雨にも負けず』宮沢賢治	白根 義輝	p.6
「10年前のできごとです」	久保田 和彦	p.7
「笑顔で神様と繋がっていき、祈りの生活をしていきたい」	石川 万奈美	p.10
「お証し 神様の見えない御手に守られて」	高井 幾世	p.11
「私の信仰生活と題して幼少の頃からを通して証をします」	星野 浦男	p.13
「信仰を与えて下さった神様に感謝しています」	根岸 千恵子	p.15
「右手首複雑骨折からの学び」	白井 豊子	p.15
「出会い」	島田 正敏	p.17
「感謝して天国へ旅立った中川姉からの学ぶ」	犬塚 志朗	p.18

### 「主イエスに向かって」

羽入田悦子

聖書には印象的な場面が随所にあります。その連続と言うべきかも知れません。そのような中で私が最近特に心惹かれている二つの場面があります。

その一つはマルコ福音書10章で、道端で物乞いをしていた盲人バルティマイが、主イエスが通りかかれることを知って、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び続けるところです。周りの人々が止めますがバルティマイは聞かずにますます激しく叫び、それを耳にされた主イエスが立ち止まって「あの男を呼んで来なさい。」と言われることなのですが、私が特に心惹かれるのはこの後、「主がお呼びだ」と聞かされたバルティマイが上着を脱ぎ捨て、躍り上がって主イエスの所へ跳んで行く場面です。

もう一つはヨハネ福音書21章で、復活された主イエスが3度目に弟子たちに姿をお見せになるガリラヤ湖畔での場面です。既に二度弟子たちは復活の主にお会いしているのですが、森島 恵牧師のお説教によりますと、主イエスを裏切った自分自身への絶望やユダヤ人に捕まるのではないかとの恐怖で彼らは疲れ果てていたということで、この時も生きる気力を失ったままのように感じられます。そんな中でペトロ以下7人が、漁に出かけます。ペトロを含む彼らの大半はかつて漁師だったのですが、一晩かかっても何も獲れず諦めようとした矢先、岸に立っておられた主が「舟の右側に網を」と言われ、その通りにすると引き上げられないほどの大漁となったのです。ここで私が心惹かれるのはこの後、湖のほとりに立っておられるのが主イエスだと知らされたペトロが、自分が裸であることに気づき上着をまとして湖に飛び込み、主イエスに向かって泳ぎ出す、という場面です。

この二つの場面を何度も思い浮かべている内に、私はこの二つの場面には共通のものが二つあることに気づきました。その一つは上着です。バルティマイの上着ですが、森島牧師のお説教によりますと、当時ユダヤでは施しを受ける者はその目印として水色の上着を着なければならなかったそうで、それを身に着けて命を繋いでいる人々にとってはそれはまさに生きるための命の綱ということだったのです。ところが「主がお呼びだ」と聞いたバルティマイは、それまで自分の命の綱であった大切なその上着を放り投げて、主に向かって走って行ったのです。彼の主イエスへの圧倒的な信頼が明らかになる場面です。このようにバルティマイは上着を脱ぎ捨てるのですが、ペトロは反対に脱いでいた上着を身に着けます。上着を着て泳ぐのは苦しいことだろうと思うのですが、裸で主の前に立つことは出来ないというペトロの主イエスに対する思いが見えてうれしくなります。

もう一つ共通しているもの、それは二人が共にお立ちになっている主イエスに向かって突進して行くところです。目の見えないバルティマイは何かにつかるとは心配になるのですが、何の迷いもなく上着を捨てて主の元へ駆けて行きますし、ペトロもかつて主イエスと共にあった時の勇敢なペトロに戻って躊躇など一切なく、上着をまとして夜明けの湖に飛び込み、弾丸のように主に向かって行きます。二人揃って主イエスに突進して行くのです。この後、バルティマイは癒されて主イエスに着き従い、ペトロは湖岸で主イエスによって整えられた朝食を他の弟子たちと共にいただきます。そして後日、聖霊を受けた弟子たちは宣教に立ち上がることになるのです。

この二つの場面を思い浮かべる時、私はいつも温かな思いに満たされ、心が弾むのを覚えます。そして、それと同時にあの時二人の前にお立ちになっていた主イエスが、2千年を経た今、私の前にもお立ちになってくださることに気づかされるのです。すべての人の前に主がお立ちになっていることを確信させられるのです。残念ながら私の信仰は二人に及ぶべくもなく、その上年齢を重ねてしまいましたので、彼らのように突進することは出来ませんが、お立ちくださっている主イエスに向かって、ただひたすら弛まらずに歩ませていただきたい、その思いを日々新しくさせていただくのです。



私は中学生で、昭和23年16歳の時、兵庫県明石市の人丸教会で洗礼を受けました。敗戦後数年たっていました。まだ回りは戦争の傷跡深く、手付かずの状態だったと思います。父は医師であったのですが、過労であったところへ、腸チフスという感染症にかかり何日も高熱にうなされた上死亡、母親も後を追うようにして亡くなりました。残されたのは11才上の兄と姉と3人で、兄は学徒出陣から帰り、兄の働きで家計はなんとか支えられたようです。毎日が味気なく、寂寞とした日々が続きました。しかし教会では礼拝後、昼によく大きなお釜で雑炊をいただきました。英国の宣教師バークレー・バックストーン師が戦前に日本の松江で始めた超教派の教会で「日本伝道隊」です。私共は隣町西明石駅の近くに住んでいました。入信のきっかけは、牧師が私どもの住んでいる村までこられ、週日には、夜の家庭集会があり、土曜の午後は中学生のための英語による聖書「ヨハネ伝」を読む会が開かれていたのです。私にとって生まれて初めての聖書の世界は新鮮でした。特に「山上の説教」のイエスの言葉はユダヤ教の習慣となっていて、しかも日常生活の隅々までを支配していながら、形骸化していた「律法主義」に対する厳しい批判でした。律法主義を批判しながらも基本を守ることが逆に律法を完成するものだという、その純粹さにうたれました。 当時は教会では「武士道」の影響をうけた、内村鑑三の本が読まれ、姉は「ヨブ記」私は「求安録」などを読んで、毎週教会へも通っていました。しかしある時教会員で広島文理大を出られた数学の先生が「毎週教会に来ていて勉強の方は大丈夫ですか。」と言われたのです。これはすごい忠告でした。

大学にはいったからは、数年後YMCA(学W)の寮(地塩寮)に入寮でき、他の学部の学生との交流を楽しむ機会をあたえられました。医学部の学生から「帝王切開」の話、経済学部の学生からは「資本論」の概要について、文学部の友人とは裁判記録(チャッターレー裁判)を見ながら「文学と社会性との関係」などを考える機会を得ました。が何ととっても共通問題は「信仰と学問することは矛盾しないか」一信仰の個別性と学問の客観性一でした。

社会に出てからは40年間、建設業しかもトンネルを主体とした土木工事で、大井川上流の水力発電所関連工事や新幹線の工事でした。怪我人の世話や、会計の仕事が主で、この間は教会には行きませんでした。しかし退職してから、沼津で香貫教会の「愛鷹伝道所」の世話をしていた女房の両親が近くに引っ越ししてきて間もなく、金沢文庫教会に通うようになり、私どももお世話になったのです。こうして再びキリスト教に接し、遠藤周作をはじめとする諸作品の読書会に参加させていただくこととなり感謝であります。ただ聖書は何人もの記者によって書かれており、奥が深くわからない面(多くの奇跡物語など)が今もあります。

最後に最近感じた話をしておしまいにします。それは『アメージンググレース』という讚美歌です。この英語の歌詞が素晴らしい。作詞は ジョン、ニュートンという、英国人で、母親は敬虔なキリスト教徒だったといえます。彼は荒々しい奴隷売買に関係する船長でした。ある時台風に会い船は沈みそうになった時、始めてお祈りをしたそうです。船倉の荷物が船の穴を防ぎ無事助かったといわれています。ジョン、ニュートンは、やがて回心して牧師になりました。

最初の一節を読まさせていただきます。

Amazing Grace, how sweet the sound

That saved a wretch \* like me

I once was lost, but now am found

Was blind, but now I see

\* 惨めな人、人でなし

以上



「雨にも負けず」 宮沢賢治

白根義輝

雨にも負けず  
風にも負けず  
雪にも夏の暑さにも負けぬ  
丈夫なからだをもち  
慾はなく  
決して怒らず  
いつも静かに笑っている  
一日に玄米四合と  
味噌と少しの野菜を食べ  
あらゆることを  
自分を勘定に入れずに  
よく見聞きし分かり  
そして忘れず  
野原の松の林の陰の  
小さな萱ぶきの小屋にいて  
東に病気の子供あれば  
行って看病してやり  
西に疲れた母あれば  
行ってその稲の束を負い  
南に死にそうな人あれば  
行ってこわがらなくてもいいといい  
北に喧嘩や訴訟があれば  
つまらないからやめろといい  
日照りの時は涙を流し  
寒さの夏はおろおろ歩き  
みんなにでくのぼーと呼ばれ

褒められもせず  
苦にもされず  
そういうものに  
わたしはなりたい

以下の文章に出てくる斉藤宗次郎とは、宮沢賢治作の『雨にも負けず風にも負けず』の実際のモデルとなった人です。

斉藤宗次郎は、岩手県の花巻に1887年に禅宗の寺の三男として生まれました。彼は、小学校の教師になりますが、内村鑑三の影響を受けて聖書を読むようになり、洗礼を受けてクリスチャンになりました。

しかし、それからが大きな戦いのはじまりでした。

当時は、キリスト教は、「ヤソ教」「国賊」と呼ばれていました。彼は洗礼を受けた時から迫害を受けるようになり、石を投げられ、親にも勘当され、小学校の教師を辞めさせられてしまいました。それだけではありません。迫害の手は、家族にまで及んできました。

近所で火事が起きたとき、全然、関係がない

のに、嫌がらせで、放水され、家を壊された  
ことがありました。何度もガラスを割られる  
こともありました。

そして、さらにひどい迫害が起こりました。  
9歳になる長女の愛子ちゃんが「ヤソの子供」  
と言われてお腹を蹴られ、腹膜炎を起こして  
亡くなってしまったのです。亡くなる時、愛  
子ちゃんは、讃美歌を歌って欲しいと言い、  
讃美歌を歌うと、「神は愛なり」と書いて天  
に召されたそうです。

宗次郎はそのような苦しみの中で、神様に  
祈りました。そして、彼は「御心がなります  
ように」とくじけることなく神様を信じ、神  
様に従い続けたのです。普通なら、迫害のな  
い違う土地へ移るところですが、宗次郎は、  
むしろ、その土地の人々に神様の愛を持って  
仕えることを選びました。

牛乳配達と新聞配達のため一日40キロの  
配達の道のりを走りながら迫害する人々に  
キリストを宣べ伝えました。10メートル走  
っては神様に祈り、10メートル歩いては神  
様に感謝をささげた話しはあまりにも有名  
です。

そして、子供に会うとアメ玉をやり、仕事  
の合間には病気の人のお見舞いをし、励まし、  
祈り続けました。彼は雨の日も、風の日も、  
雪の日も休むことなく町の人達のために祈  
り、働き続けました。彼は「でくのぼう」と  
言われながらも最後まで愛を貫き通したの  
です。そして、1926年に彼は内村鑑三に  
招かれて、花巻を去って東京に引っ越すこ  
とになりました。

花巻の地を離れる日、誰も見送りには来て  
くれないだろうと思って駅に行くと、そこに

は、町長をはじめ、町の有力者、学校の教師、  
生徒、神主、僧侶、一般人や物乞いにいたる  
まで、身動きがとれないほど集まり、駅長は、  
停車時間を延長し、汽車がプラットホームを  
離れるまで徐行させるという配慮をしたと  
いうのです。実はその群衆の中に若き日の宮  
沢賢治もいたのです。

それは、彼が「御心がなりますように」と  
祈り、神様の御心に従った強い信仰と、どこ  
までも人々を愛し続けた愛の業がそうさせ  
たのだと思います。

この人こそ、東に病気の子供あれば行って  
看病してやり、西に疲れた母あれば、行って  
その稲束を負いという宮沢賢治の詩にある  
ようなことを普通にやっていた人でした。

そういう宗次郎の生活ぶりを見ていた、宮沢  
賢治が、「こういう人になりたかった」とい  
う思いを込めて、「雨ニモマケズ」という詩  
を書いたのではとされています。

「雨にも負けずと実際のモデル」より

以前に、宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」に  
は、モデルがいたという話を聞いたことがあ  
るので調べてみました。

斎藤宗次郎というクリスチャンを知り、そ  
の壮絶な信仰、人生に感銘を受けたので、御  
存知の方も多くいらっしゃると思いますが  
紹介させていただきました。

日曜日は礼拝を守っていますが、自分は、  
サンデークリスチャンだと自認しています。  
それは、毎日、自分を喜ばせる生活を送っ  
ているからです。自分には本当に信仰があるの  
かと自問自答することがあります。

「行いのない信仰を見せなさい。そうすれ  
ば、わたしは行いによって、自分の信仰を見  
せましょう。」ヤコブの手紙2：18

ヤコブの手紙は福音を伝えているというより、道徳を教えていると言われますが、少しでも、愛が発露する信仰生活を送りたいものです。

「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつま

でも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」コリント一13：13



### 「10年前のできごとです」

久保田和彦

私は第二の人生に移り、タクシードライバーの仕事をしているときのことでした。夏の終わりに、能見台で客待ちしていた時に、本を読んでいた。こちらをちらちら子どもが覗いていたのですが、大声で「この運転手さん聖書を読んでいる！」と叫んだのです。私もびっくりして身を



起こしたのですが時間帯が駅から帰る人が多く、その子の周りに



いた人も立ち止まって、車を覗き込んでいました。私も窓を開けて、その子と話をすることになりました。子どもさんは関東学院六浦小の三年生ぐらいだったと思いました。2泊3日で伊豆に修養会の旅を終え帰宅途中であったのです。自分達が使っている表紙が魚の絵の聖書だと確認して叫んだのです。お祖母さんが迎えに来ており、家に帰るところだったのです。お祖母さんが能見台通りで買物している間、彼と話しました。彼は「聖書のどの箇所を読んでいるのか」と聞くので、「ガリラヤの手紙」と答えてしまったら、「ガラテヤの手紙じゃないか」と言われ、私もパニックになってしまいました。当時、讃美歌の「ガリラヤの風かおる丘」をよく教会で歌っていたのでつい間違えてしまったのです。そして、さらに「ガラテヤの手紙は、パウロが書いていて、霊の実、愛を含めて9つの実は大事です」というのです。びっくりしました。

それから「新約聖書の福音書と手紙の中で何が好きですか」と聞かれたので「ローマ人への手紙です」と答えると彼も「ロマ書は大好きです」と答えるのです。いつも家の前まで行くとお祖母さんだけ先に行かせて彼は「運転手さん、ぼくも頑張るから、イエス様のために一緒に頑張ろうね」と言っていました。

次に会ったときは「どこの教会に行っているのですか」と尋ねられたので「金沢区釜利谷



の文庫教会で、牧師は白根先生です。先生は関東学院六浦高校の聖書の先生です」と答えました。私は彼が聖書をよく知っているのが家族の方、友人の方、教会関係者がいられるのか尋ねたところ、父、母、おばあちゃん、長男（関東学院六浦中学2年、次男（関東学院六浦小6年）ですべてキリスト教に関心ないことがわかりました。

能見台のタクシー乗場で私のタクシーを見つけると、私のタクシーに乗るため順番が来るまで、他の乗客に譲ったりしていました。いつも乗客として乗り込んで、洋菓子か和菓子にお祖母さんは買物し、私と彼はタクシーの中で聖書の話とキリスト教の話をしました。夜眠るときはお祈りする。朝起きたらどんなお祈りをする？ 散歩するときにはどんなお祈りをするのですかなど。彼は降りる時は「運転手さん、イエス様への信仰の義は、くじけないで互いにがんばろうね」と話すのです。

そしてある時、「運転手さん、キリスト教の文学書で読んだ本の感想を教えて！」と訊くので私は当時読み終わっていたドフトエフスキーの「罪と罰」の話をしました。

主人公のラスコーリニコフとソーニャの物語です。ラスコーリニコフは「老婆とその妹も殺してしまった」とソーニャに告白する。ソーニャも養父の酒代を稼ぐために娼婦になった。ソーニャは自分を殺して娼婦になったが、病死したラザロがイエス・キリストによって蘇生したように一度死んだ自分もキリストを信じることにより、いつか復活できることが彼女の生きていく支えだったのです。ソーニャが「聖書ヨハネ 11章のラザロの復活のくだりをラスコーリニコフに読んで聞かせる場面が感動的です。ロシア人（スラブ人）は悔い改めの時、大地に身を投げ、大地に接吻し、大地を涙で潤し初めて心に感じるのです。日本人、西欧人が天に向かって祈るとき、ロシア人（スラブ人）は地に臥して祈るのです。そして二人はシベリアの流刑場に行くのです。よく晴れた朝、ラスコーリニコフは目の前の原野に点在する遊牧民のテントを眺めていた。それは旧約聖書のアブラハムの時代を思わせます。夢のような静かな光景だった。そこに突然ソーニャが現れる。何ものかに突き飛ばされたようにラスコーリニコフは彼女の足元にひれ伏し、泣きながら彼女のひざを抱きしめる。彼の魂が救われ、新しい生命が復活した瞬間であった。……

この話を彼は目を輝かせて聞いてくれました!! 私は彼に出会えためぐみをイエス様に感謝したく、この日の夜、休む前の祈りのあと、喜びで眠ることができませんでした。

それからしばらく、お祖母さんしか乗車しなくなったので、「お孫さんは？」と聞いたところ、「父親の仕事の関係でカナダに家族全員で行ってしまったの。いつ帰るかわからない。長くかかりそう」との話だった。この出来事を教会員の耳鼻科医師中山先生に話したら、「幼い友が、イエス様の聖霊に満たされている！能見台って凄い!!」と喜んでいました。

その後、私もがんばろうと思い、少しでも家族の信仰に追いつこうと思い、神学校に通い勉強しました。そしてタクシー運転手としての経験は、私の人生において、世の人々と接することができます。接客の体験なので、いやな人、困ることもありますが、それを乗り越えることで神様に、この恵を与えられたことに感謝いたします。私の家族は5人、男の子は3人、孫は8人おります。一番上の孫小学6年の女の子は、夏のバイブルキャンプは中止となりましたが、ズームでバイブルキャンプに参加でき、喜んでいました。感謝であります。孫たちへの信仰継承がなされますように祈っています。



「笑顔で神様と繋がっていき、祈りの生活をしていきたい」

石川万奈美

私が初めて教会に行ったのは小学校低学年の時でした。

アメリカに住んでいたクリスチャンの伯母が帰国すると一緒に連れて行ってくれました。

そこは私にとって異空間であり子供心に清らかさを感じる時間でした。

あの暖かい喜びを感じる時間はしっかりと心に残り教会に行くことはなくとも時々、思い出していました。

大人になって勿論たくさん様々な苦しみ、悲しみ、悔しさを経験しました。

通勤電車から見る丘の上に十字架を見るたびに胸が熱くなりました。

また、クリスマス時期には、教会に来ませんか？というメッセージを見ると心が揺れました。

今になれば神様とつながってメッセージを受けていたのだと思います。

私は金沢文庫教会に来るまでに夫の仕事がうまくいかない事があり、途方に暮れていました。

生活はどうなるのであろうか、夫の仕事はどうなっていくのか、そんな不安との闘いでもう自分を奮い立たせるのにも気力に限界がきていました。毎日、毎日が不安でした。

なぜ、こんなことになるのだろう。〇〇が悪い、〇〇のせいだ、そんなことばかりが頭の中を一日中巡っていました。

そんな時「うちの両親が牧師をしている教会に行ってみて!!お説教は心が震えるよ。そして讃美歌を思い切り大きな声で歌ってきてごらん」と、メッセージをくれた友がいました。

牧人先生、恵先生のお嬢さんの真奈さんでした。

教会に行きたい、でも何だか行きにくい・・・そんな葛藤の数週間がすぎました。

ドキドキしながら、小さくなり、教会に一步踏み入るとそこには子供の頃に教会で見たような懐かしい明るい光がありました。それからは不思議です。バプテスマを受けたい、学びたいという気持ちに変わり、その気持ちは揺るぎませんでした。

私は、聖書をひたすら読み、コリント人への手紙第一・12章にたどり着きました。

7節～11節はまさに私が証をするためのものでした。

私は苦難の真最中、だめだ、だめだ、と人を責め続け暗い穴に入っていたのに、突然

「そうだ、こんな切り抜ける方法がある」「~を活用する方法があるかも」等、次々に冷静に思いついていったのです。

本当に突然頭に入ってきたのです。

まさに神様、イエス様からの聖霊の力により知恵が与えられました。これに気が付き私にはただただ、感謝の気持ちが溢れてきました。

そこからは我が家は地道ではありますが、軌道修正の道に入ることができました。

今でもまだまだ学びの足りない私は嫌なことがあったり、悲しいことがあると元気がなくなり「今日は教会に行く気持ちになれないなあ」と気持ちが逆戻りしてしまうことがあります。

そんな時は教会についても、またしても体も声も小さくなっています。しかし教会に入り暫くすると活力がみなぎってきます。

教会は神様のお心を聞けるところ、そうしていつも一緒にいてくださると感じる場所なのです。

神様はどんな時でも見捨てることがなく、また、どんな時でも見守ってくださり、私たちに信じて赦してくださいます。

目に見えなくても、手で触れることができなくても、それは心で感じていくのだと思っています。

一時、教会から離れていた私をも神様は迎え入れて下さり寄り添ってくださいました。

感謝です。

これからも私は、今度は笑顔で神様とつながっていき、そうして今日も祈りの生活を続けていきます。



「お証し 神様の見えない御手に守られて」

高井 幾世

2年前のちょうど今頃コロナの感染が報じ始められた頃から、その年私は乳がんと緑内障のため手術が続きましたが、たくさんの方に支えられ治療を受けることができました。皆さんにもお祈りいただきありがとうございました。病気の時も、そして今も神様に守っていただいていることを感謝して一言お証しさせていただきます。

以前「あかしびと」にも書かせていただきましたが、乳がんに気づくことができたきっかけは夫とのなげない会話からでしたが、気づいたときは血の気が引く感じでとっさにどうすべきかわからず本当にパニックでした。しかしその時母の言葉を思い出しました。母は生前よく「何かあったらまず祈りなさい。そうすればそこに神様が必ずきてくださるから。」と言っていたので、その時もそれを思い出し「神様どうかここに来てください」と祈りました。すると不思議と心が落ち着き、「そうだ。まずは教会に行ってお祈り先生やみなさんに相談しよう」と思いました。それからのことは、「あかしびと」に書かせていただいた通り、治療の

道が備えられ感謝です。乳がんは突然のことでしたが、緑内障の方は20年も前から大きな病院で目薬の治療を続けていましたが、その間にも症状は徐々に悪化して、がんの手術の1～2年前あたりから急に視力も下がり始めました。このままでは失明するのではと不安でいっぱいでしたが、マタイによる福音書7章にある「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる」との御言葉にすがりつつ知っている方みなさんにお聞きしたり、ネットや本で色々調べる中で幸いにも専門の有名な先生に診ていただくことができ手術していただきました。私の目は特殊でこれまでお医者さんにも診断が難しかったようで、左目は残念ながら手術の後もほとんど見えませんが右目の視力が矯正して0.6位が残り眼圧も前より落ち着いて、なんとか日常生活が送れる状態で感謝です。

ただ、本を読んだりパソコンを見たりがしづらくなったり、仕事も続けられなくなったりとできなくなったことを思うと寂しさを感じる時も正直あります。また今後のことを考えると不安を覚えることもあります。逆に病気になったからこそできるようになったこともあります。運動嫌いの私が、少しでも病気の悪化を防げるならと今は家の近くの緑道を毎日ウォーキングするようになりました。食事も大好きだったお肉やお菓子を控えて、教えていただいた酵素玄米や野菜・魚中心の食事をいただくようになりました。考えると、病気になる前より健康的な生活を送れるようになり、以前より風邪をひかなくなったように思います。

そして引退が少し早まったおかげで教会の週日プログラムにも参加させていただくようになりました。賛美の会では先生方にご指導していただき、歌の苦手な私ですがみなさんとともに楽しく賛美することができ、家でも口ずさんでいます。賛美を通し御言葉に触れ、励まされています。キリスト教入門の会では、本の学びを通し先生や皆さんの貴重なお話を聞かせていただき、楽しい語らいと交わりの場に入れていただいています。今ちょうど新しい本に入れ替わったところですが、前はスイスの精神科医のトゥルニエ先生の「人生の四季」という本を学びました。この本では、人は神様の計画の内にこの世に誕生しどのように成長し発展、成熟し人生を終えるかということが書かれています。その中で私は自分の人生を振り返り、これまでの過ちや間違いを思い後悔することもたくさんありましたが、それと同時にそんな過ちの多い私を神様が守ってくださったことに感謝せずにはおれません。今回の病気もそうですが、これまでも何度もこの弱い私のところに神様は来てくださり、助けてくださったおかげで今があることをつくづく思います。

病気もあり身体の衰えとともに不安を感じることもあります。それらの思い煩いを神様にお委ねし、これからも主が支えてくださることを信じおすがりしつつ歩んでいきたいと思っています。信仰の薄い私ですが、こうして教会につながっているおかげで、神様の見えない御手に守られて生活できる恵みを感謝します。



「私の信仰生活と題して幼少の頃からを通して証をします」

星野 浦男

私の生まれは 1934 年（昭和 9 年）群馬県前橋市で周囲を両毛三山と呼ばれる赤城、榛名、妙義山の裾野に囲まれた前橋市の西よりで（現在の前橋市は町村合併で私の住んでいた当時の 10 倍位の広さになっています）そして谷川岳を源流とした利根川と広瀬川の間、岩神町と言う所です。

私が忘れようとしても忘れられない昔の記憶ですが 1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日正午の第 2 次世界大戦の敗戦を当時の天皇陛下の玉音放送で聞き終戦を知りました。

終戦の 10 日前の 8 月 5 日夜から 6 日朝方に向け、B29 爆撃機の攻撃を受け前橋市の市街地の 80% が焦土と化しました、爆撃の様子は空襲警報で飛び起こされ自宅の裏に掘った簡単な防空壕に入りフトンをかぶっていましたが、B29 の耳も裂けるような爆音の凄さ無数の焼夷弾の落下音と機銃掃射音で生きた心地がしませんでした、暫くして町の方を見ると町全体が燃えていて空が真っ赤でした、父親から当分の間町には近づいては行けないと言われましたが、人伝に聞いた所お寺等の庭には身元の確認の取れない人が山積みになっているとのことでした、終戦が 10 日早ければこのような惨事はさげられたと思われま

す。話は次に進みます、私ですが 1952 年（昭和 27 年）4 月群馬県立前橋工業高等学校機械科を卒業して当時は就職難で、歌にもある、ああ上野駅の集団就職列車の話はこれから 5 年位後の話になります、私は友人の父親が東芝に勤務していた関係で友人は東芝に入社し私は友人の父親の紹介で川崎の中小企業に入職しました。

住むところは与えられましたが食事が自炊のため大変でした、母が当時食事券この券があると食堂で雑炊を 1 杯食べられる券とパン券（之が無いとパン 1 斤が買えない 1 人 1 日 1 回だけ買えます）を前橋の親戚及び知人から集めて送ってくれました。

当時月末が近づくと食料を買うお金も無く夕闇せまる多摩川の土手を食事もせず歩いてた事を思い出します、とにかく今思いだしても良く我慢して頑張ったと当時を思い出します。

私の両親と兄は前橋市にある救世軍の会員でした、母は常々「見ないで信じるものは幸いである」ヨハネ 29 章 29 節ですが我らの救い主イエスキリストを信じて横浜の救世軍に行きなさいと言われました、当時の私の 1 人での生活を心配しての事と思います、その縁で救世軍の横浜小隊に入隊しました、3 年間位救世軍の集会活動とうに参加していましたが、その後の日本の高度成長期でとにかく早く製造装置を作れと（月月火水木金）と戦時下の歌にもありましたように当時は土日の休日も無く国内は北海道から九州までの工場と海外では中近東ではサウジアラビアには 1966 年～1980 年の間に通算 6 回 1 回が半年から 1 年 イラン及びイラク南米エクアドル アフリカナイジェリア等のプラントの建設現場を飛び回り通算 31 年間家庭のことも顧みず仕事一途の生活でした、その為救世軍の集会、活動等出来なくなりました。

1985 年社内移動で本社勤務になり人並みに土曜日は半日出勤／日曜祝日は休めるように

なりました。

当時私の義弟に当たる故大井牧師から誘われ金沢区平潟町にありました聖星保育園内にありました聖路教会の牧師をしていた関係で家内と共に通い始めました、この時に神様のお導きがあったと思います。

大井牧師が関東学院定年退職後金沢文庫教会に移りましたので、金沢文庫教会の礼拝に通うようになりました。

大井牧師が生前お兄さんバプテスマを受けましようと言われましたが大井牧師のあまりにも早い別れの為実現出来ませんでした（ボートで釣りに行こうとかいっぱい楽しみを話だけで神様の身元に行ってしまいました。

その後 2009 年イースターに白根牧師、中山先生始め教会員皆さんに背中を押され、皆さんの多くの祈りに支えられて家内と共にバプテスマを受けさせて戴き心身共に満たされています。

今年私達夫婦は米寿を迎えましたがこれからも森島牧師夫妻の導き、又教会員の皆さんの助けを借りながら神様を賛美し我らの救い主 復活を通して生きておられるイエスキリストを信じて行きたいと思います。



信仰を与えて下さった神様に感謝しています

根岸千恵子

頑固の私は、夫と火花を散らしては、いつも疲れていました。が、聖書に  
いつも喜んでいなさい

絶えず祈りなさい

どんな事にも感謝しなさい

というみ言葉を思ったとき、どんなことにも「ありがとう!!」という事に  
しました。感謝することを覚えるといつも穏やかでいることに気づきまし  
た。あとになって、これは主の賜物であったと感謝しました。

聖書を読み感謝の祈りができるときは慰められます。

頑固な気持ちで祈りを忘れているときは主を感じる事ができません。

熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを吐き出そうとし  
ている。このみ言葉を思う時なまぬるい信仰の私は不安になり、

「主しか避けどころがありません。憐みをもって救い上げて下さい」  
と祈ります。

このような日々を与えて下さったことを感謝しています。



### 「右手首複雑骨折からの学び」

白井 豊子

右手首複雑骨折という試練は様々な気づきを与えてくれ、これまで当たり前のように思っ  
てきたことが、どんなにか恵みのうちにあったのかを教えてくれるものでした。

2012年7月22日(日)夜の9時半、雨上がりで、たまっていた洗濯物を必死で干してい  
ました。二枚のタオルが残っていたことに気づき、かけようとした時踏み台から転倒、身体  
を支えようと変に右手をついたのです。手とは思えないような形になって強烈な痛みが走り  
ました。救急車で安曇野日赤に行き、応急処置をしてもらいました。翌日病院に行くと医師  
は「わりといい骨折だ」と言ってギブスをかけてくれました。

二週間後通院すると「悪くなってますね」と言われ、それから二週間後には「一層悪くなっています。手術するか、このままいくか決めなければなりません」と言われたのです。訊くと「手術しても、吊ったりします。このままだと重い物を持ったりするのはやりにくいけど、日常に差しつかえないでしょう」と言うのです。他の病院に移って相談したら「このままいくのがよい」と言われ、9月4日までギブス生活が続きました。ほぼ一カ月半のギブス生活でした。

洗濯物を干すにも一苦勞で、左手だけではできず、右手でなんとか押さえねばならないのです。大根などを切るときも、棒を右手代わりに大根に刺して押さえ、何とか左手で格闘するようにして切ります。片手だけではなんと大変なことか、支える手があって動けるのだと発見しました。

支えは陰の力で目立たないけど、動くための大きな土台になっているのではないかと思います。神様の働きがまさにそうなのではないかと思います。詩編では神の支えについて何度も語られています。

詩編 54・6 「見よ、神は私を助けて下さる。主はわたしの魂を支えてくださる」 詩編 94・18 「足がよろめくと私が言ったときあなたの慈しみが支えてくれました。」

ギブスをやっと外せてからは一層大変なりハビリがあるのです。ソーセージのように腫れあがった指を動かすのは一苦勞。グーの形になるように左手を添えながら百回以上練習するのです。くるみがリハビリの友となりました。

失ってみて知ったのです。これまで当たり前やってきたことは、いかに恵みのうちにあったのかを。六十年余り当たり前やれてきたのに、今グーの形一つとってもこんなにも難しいのですから。一度失ってしまうと、取り戻して以前のようにするのはどんなに大変なことかを知らされたのです。

人の体は神のくれた最高の作品なのだ強く感じさせられたのです。

右手首骨折で生活も一変し、治すことを中心にした生活となり、多くの人の助けを頂きました。

聖書では体のことについて I コリント 12 章で次のように語っています。

14 体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。25 各部分が互いに配慮しあい、一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しむのです。

神様とのつながりの中にすべてがあることを伝えてくれていると思います。

リハビリは二か所で週四回行い、二月末まで七カ月も続きました。右手首は十度曲がってついたものの、痺れも治り何とか使えるようになりました。よい医師に最初から出会っていたら、もっと早く治っていたのかもしれませんが、気づきは無かったかもしれません。どんな時にも神様の計らいがあるのだと思います。

五月、安曇野では一斉に花が咲きます。花々は寒い冬、地中で芽を出す準備





をしていたのです。私も右手首複雑骨折の試練を経て様々な気づきと希望を頂きました。五月には絵手紙展示会出品、六月には書道準師範のためのテストにも挑戦できたのでした。感謝です。

白井豊子画



### 「出会い」

島田正敏

私は、千葉県館山市で生まれ、高校まで生活していました。実家には、仏壇、神棚があり、祖父が毎朝お水を替えていました。年中行事も仏教の教えにしたがったものでした。私の知り合いには、キリスト教会に行っている人や洗礼を受けた人は、一人もいませんでした。「キリスト教」という言葉を知ったのは学校での授業が初めてでした。仏教以外の宗教が世界中にはたくさんあるというのは驚きでした。

関東学院大学に入学して「キリスト教概論」の授業を受講しました。先生は、元学院長の松本昌子教授でした。私は、クラブ活動で二人の先生に出会いました。中居 京先生と山根一夫先生です。

中居先生にお会いした時、先生は70歳ぐらいだったと思います。中居先生は、小学生の時に鉄棒から落ちて視力が弱くなってしまいました。私がお会いした時は、ほとんど見えなかったと思います。聖書を読むときは、分厚いレンズの眼鏡をかけて聖書に目を数センチの距離に近づけて読んでいました。中居先生と親しい方々は、「中居先生は、新約聖書を暗記していると思う。」とおっしゃっていました。中居先生は、関東学院教会牧師、関東学院大学神学部長、関東学院六浦幼稚園の初代園長、などを歴任されました。

関東学院大学には、終戦後「青雲寮」という男子学生寮があり、寮長も兼任していました。戦後の貧しい時代、多くの学生が中居先生に借金をお願いしたようです。先生の手元には、段ボールに入った「借用書」が数箱あったといわれています。

中居先生のお父様は、東野の豪商だったそうですが、ある時、東京から来た宣教師に出会い、洗礼を受けたそうです。その影響で中居先生は、牧師を目指しました。中居先生は、神学校で学ぶために風呂敷を担いで東野を出ました。やっとのことで東京に着いて風呂敷を開けてみると、お母様からの手紙とお金が入っていたそうです。その時は涙が出たそうです。中居先生のお父様は、「つねに祈りなさい。」「初志を貫きなさい。」「お金に淡泊でありなさい。」と言っていたそうです。中居先生はその教えを実践されました。

中居先生は、101歳で天に召されました。

もう一人の先生は、山根一夫先生です。関東学院高等商業部を卒業した中居先生の教え子です。横浜文化賞を受賞したりした日本で初めてのプロの合唱指揮者です。学生時代に受洗したそうです。

私は大学を卒業して、関東学院六浦小学校に勤務しました。数年後、中居先生から「島田君も小学校に勤務したのだから、キリスト教について考えたらどうですか?」と言われました。私は、「先祖代々のお墓もありますし、家には仏壇、神棚もあります。」と言いました。しばらくすると山根先生からも同じことを言われました。私は尊敬するお二人の先生からのお誘いを断りました。

小学校に勤めていた時に、タイの山岳民族子供支援活動を始めました。ある時、山の中で「関東学院大学の先生が、学生を連れて来ている。」という話を聞きました。数年後、六浦小学校の校長として森島牧人先生が就任しました。タイの山の奥に学生を連れて行ったのは、森島牧人教授でした。

しばらくして、森島先生から洗礼のお誘いを受けました。私は、支援活動をしていたタイのティワタ村の教会で受洗しました。そこはナマズを飼育している大きくて汚い池でした。

私は、たくさんの尊敬できる方々に出会えたことに感謝しています。



### 「感謝して天国へ旅立った中川姉からの学び」

犬塚 志朗

お世話になった皆様

大変長い間、皆様にはお力添えをいただき、暖かい言葉で支えてくださり、ありがとうございました。

一歩一歩に光を力をいただき、楽しい毎日でした。

来年の春で癌告知を受けて二十年、日進月歩の医学も現代では秒速で進歩しています。安心して嬉しいことですね。どうぞ皆様には健康にご留意くださって、充実した日々をお過ごしください。私の信じるイエス様を通して神様にお祈りいたします。

釜利谷に住んで四十六年、すべての道は主イエスにつながり、主と共に歩むことができて幸せでした。ゆだねて平安をたくさん賜りました。感謝です。お許しただければ、祈りとともにみ恵みをお届けしたいと思っています。

大変お忙しい中お別れに来てくださり、ありがとうございます。

平成二十八年五月末日

病室にて 中川 澄子



挨拶文は天に召された中川姉が、死を予感して天国へ旅立つ半年前に病室で書かれたとのこと。私は主日礼拝や家庭祈祷会で数十年お世話になりました。癌を告知されていながらいつも笑顔で「感謝、感謝」「癌告知されたのが私でよかった!!」と、キリスト信者の模範です。私たちの教会機関誌「あかしびと」には毎回姉妹は寄稿して下っています。(教会のホームページ「機関誌」には2006年から54号その後毎回寄稿くださっています。ぜひご覧ください)

ご家族の姉妹の葬儀での挨拶文は

「母は最後まで感謝の人でした。だんだん弱く小さくなっていく呼吸を家族に見守られる中、母の最期のことばは『ありがとう、ありがとう』の二言でした。初夏のころ『残された時間は数カ月』と告げられました。その中で母は毎日祈りを捧げ、淡々と旅立ちの日を迎える準備をしていました。…幸いほとんど苦しむことはない病でその日まで私たちは言葉を交わすことができました。不思議なことに時が経つほどに母の周囲は笑顔に包まれていったように思います。…」

とのこと。です。

私はといえば、去年の10月に突然癌の告知を受けました。私の父は46歳で胃癌、一歳上の兄も胃癌で69歳同じく胃癌で逝去しました。迂闊にも癌年齢真っ直中であることを忘れて健康診断受診拒否・癌予防対策はしてきませんでした。目の前が暗くなりました。即、入院、癌手術を受けました。術後、麻酔の切れたあとは激しい痛みと頻尿で寝不足が続き、もう二度と手術は受けたくないと思いました。その後再手術の約束をしましたが、お断りし、現在様子見で三カ月毎に検査受診しています。日常での生活注意事項も投薬もなしで今日まで時が流れています。良く言えば「このまま定期検査受診で大丈夫」、悪く言えば「投薬治療しても無駄、好きなように生活しなさい」とも受け取れます。

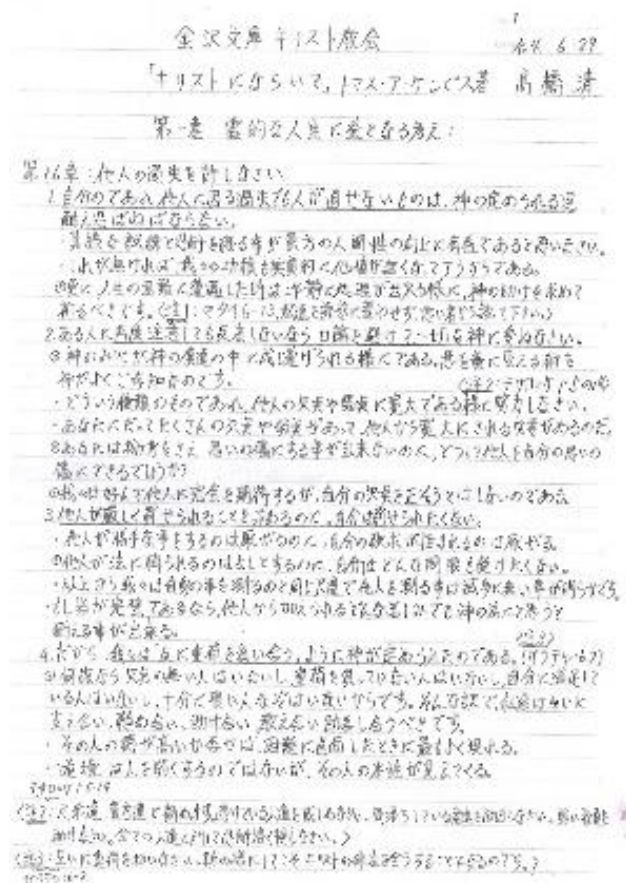
大自然の下での山小屋での田舎暮らし、農作業、野菜作り、そして田舎までの小型二輪による移動、その往復の途上でのコンビニでの食事、そこで出会う人々との交流、四季の花々との出会い・・・と夢のような人生を過ごしてきました。が、それを諦め、小型バイクも処分し、新しい人生を過ごし始めました。残念ながら中川姉妹のように「感謝!感謝!!」での生活、その域に至るには私にとってはまだまだ先ようです。

私の目ざすこれからの人生は(教会水曜集会のテキストからの学びを含む):

1. これから起こるかもしれない世界的な不祥事、自分の将来への不安、心配事を先取りして悩まない。神を信頼する
2. 神を愛し、仕えること、それ以外は空の空
3. 早く身辺整理をする
4. 神を畏れない知識は空しい 神を畏れる人は傲慢な哲学者に優る
5. 焦るな!! 注意深く気を長くして、神に従ってものごとを考慮せよ
6. 自分より劣った人はだれもいないと思い、謙虚に生きる
7. 8. 9. …

先日自転車で教会に急いで行く途中の出来事です。トンネルの中、すれ違い様に体格のよい大柄の男が私に「もっと右側を通れよっ!」と私に注意したのです。瞬間私はむっとしてしまい、「むっとするなんて、ああ、私には謙虚さが足りない。折角水曜日集会で『自分より

劣った人は誰も居ないと思い謙虚に生きる』と学んだのに」と、反省したり、また「裁くのは主……先走って何も裁いてはいけません I コリント 4:4, 5」を思い出し、まだまだ私は人として未完成だと感じるばかりです。



一般的には狭いトンネル内ですれ違う時見知らぬ同士でもお互いに軽く会釈を交わします。時には礼儀正しく暖かい励ましの声をかけてくる人もいます。

水曜日集会はテキストとして現在トマス・ア・ケンピス著「キリストにならいて」を使用しています。賛美、お祈りのあと、当日の担当者による発表、牧人牧師の解説、参加者の感想・意見交換がなされます。令4.6.29の発表者は **A4 サイズ 6枚** に亘ってしかも手書きでまとめられました。この方は日頃パソコンを駆使して発表なさいますが、当日は自筆手書きでまとめられたということです。手書きは認知症予防になります。ご高齢のキリスト者の鏡であると感動しました。

\*注 日本医師会 高齢者にお勧め一日に：一読（まとまった本を読む）・十笑（大声で十回笑う）・百吸（深呼吸

百回） 千字（手書きで千字書く） 万歩（一万歩目標で歩く）



### 編集後記（広報委員会 犬塚志朗記）

あかしびと 105号に寄せられた「あかし」には、老齢化にともない身体的病に冒されながらも、神様の御加護の下、与えられている生命にいか「感謝、感謝」の気持ちで日々をすごしているかを覗うことができます。

私たちの教会のためにお祈りいただき感謝いたします。皆様に神様の御守り、祝福が豊かにありますようお祈り申し上げます。

なお、私たちの教会では、ホームページ：kanazawabunkochurch,sun.bindcloud.jpが充実しており教会活動が見事に描写されています。是非ご覧ください。在主